

2011年7月15日
第195号

題字 住谷悦治



燎原社
(京都の民主運動史を語る会)
代表 岩井忠熊
事務局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅33-302 井手幸喜
〒606-8107
tel & fax 075 (722) 3823

BOOK 3

会員消息／情報スクラップ

15

例会案内／編集後記

16

「うたごえ」
忘れ得ぬ人

大西良慶師を語る

湯浅俊彦

14

12

10

6

4

2

2011年度総会開く 31年ぶりに規約改正 清水武彦氏が記念講演 「高山市政論」
京都における沖縄返還運動（上）――「京都沖縄守る会」の結成と前史
〔連載〕彼らを通すな 立命館「大学紛争」のなかの青春（2） 佐次田勉
〔資料〕戦火に巻き込まれてた大学 戦時下の京都の大学で教授は何をしたか
〔うたごえ〕よ高らかに！――京都の「うたごえ運動」の歩みから（1） 鈴木元

志摩肇
鈴木元
14 12 10 6 4 2

盛明氏（当時、府立大学助教授）は、「全国的視点からすれば一定の成果をあげた」と京都の運動が、路面電車をもつ多くの都市に影響を与えたと評価している。（『わが心の市電――八年間の運動の歩み』1978年、同会発行）この「会」のよびかけ人には、池田遙邨、岡部伊都子、黒田辰秋、志村ふくみ、藤川延子、西山英雄、湯川秀樹、依田義賢の各氏など著名人が名を連ねたことも特徴だった。

この一枚
[連載]

「市電をまもる会」の運動
1971～1978
直接請求署名に27万人



上は市電撤去反対を訴えてデモ行進する直接請求実行委員会の人たち（1976年3月）

下はうず高く積まれた直接請求の署名簿（1976年1月8日、左京区役所）



1971年4月27日、「京都の市電をまもる会」が結成され、同年6月に開かれた「市電をまもる市民の夕べ」でフォーク・クルセダーズの、はしだのりひこが自ら作曲して歌った。作詞は運動のよびかけの中心だった西山卯三京大名誉教授。

市電廃止反対を求める27万人もの直接請求署名（有権者の26・3%）により、1976年1月、臨時市議会が開かれたが、共産党を除く4会派の反対により否決、78年9月30日には日本最古の歴史を誇る京都の市電がついに全廃された。「まもる会」は「この世紀の暴挙に満身の怒りをこめて抗議する」声明を出し、「市バスの慢性赤字と地下鉄の大嵐赤字は交通財政のみならず市財政そのものを破局的危機に陥れる」と警告している。

今年5月29日、京都市営地下鉄は開業30周年を迎えた。

日本一高い運賃にもかかわらず毎日3200万円もの赤字を垂れ流し、5000億円の借金ですでに経営は破綻状態。

市電の赤字どころの騒ぎではないのである。

〔市電をまもる会〕事務局長を務めた広原

市電はいいな チンチン走る
大きな窓から緑の並木
通りのにぎわい 行き交う人々
眺めを楽しむ観光客……

2011年度総会開く

31年ぶりに規約改正



る一方、会員の拡大がすんでいないことから赤字が続いています。会費の前納をお願いするとともに、新しく「入会のしおり」と宣伝誌をつくりつひろく入会を呼びかけていく方針が提起されました。

また「燎原」の200号記念号を来年5月に発行することとあわせ、

なごやかに「懇親会」

「私の高山市政論」 清水武彦氏が記念講演

総会に先だって清水武彦氏（元京都市経済局長）が「私の高山市政論」と題して記念講演。清水氏は、高山市政第一期末の1953年4月に市役所に入り、高山市政が終わる66年2月まで

湯浅俊彦（ゆあさ・としひこ） 本会世話人
乙訓郡大山崎町在住。

佐次田勉（さじた・つとむ） 元沖縄返還同盟
京都府本部事務局長。沖縄県のまち在住。
鈴木元（すずき・はじめ） ジャーナリスト。中国（上海）の同濟大学アジア太平洋
研究センター顧問教授。西京区在住。
志摩肇（しま・はじめ） 行政書士、中京
民商常任理事、京都ひまわり合唱団団友。
中京区在住。

執筆者紹介

京都の民主運動史を語る会は7月2日午後、市職員会館かもがわで2011年度の総会を開きました。

総会には約30人が出席、まず岩井忠熊代表世話人が3・11の東日本大震災についてふれ、「1923年の関東大震災では軍部と右翼による自警団に市民が巻き込まれたが今回は明らかに市民社会の成長、戦後民主主義の発展が見られる。希望はあると思う」と開会あいさつ。続いて、井手幸喜会務担当世話人が会務・会計の報告を行い、蓮佛亨会計監査が監査報告を行いました。

また別項の通り31年ぶりに規約改正が提案されました。これは「会」活動の現状に合わせたものです。「燎原」の相次ぐ増頁で支出が増え

会員拡大へ全力

「燎原」、来年5月に200号記念号



清水武彦氏
企画各局で
仕事をし、
二期目の市
長選から

に民生、理
財、文化、
企画各局で
仕事をし、
二期目の市
長選から

CD-R版の合本第4巻も刊行、1
～4巻のセット販売をさらにすすめ
る方針。

総会では会則改正案の一部を修正
したうえ会務報告とともに可決承認
されました。

体制は以下の通り。

岩井忠熊（代表）・井手幸喜（事務
局長）・奥村和郎・小田切明徳（例
会担当）・川合葉子・黒住嘉輝・田
北亮介・藤井舒之・馬原郁・湯浅俊
彦（編集担当）

「高山市政打倒」を掲げた労働組合の
支部・本部の役員をつとめました。

高山市長は1950年の最初の選
挙では民主戦線統一候補として当選
しながら財政難から人件費削減や
解雇処分で職員労組と厳しく対立、
54年の二期目の選挙では保守派の支

援を得て革新系候補を制したことなど
から「変節者」といわれてきました。
清水氏はこうしたダーケゾーンの一方
で、高山市政が「かゆいところに手の
届く市政」「ゆりかごから墓場まで」
の福祉行政の充実、宝ヶ池市営競輪の廃止や
「青少年に音楽とスポーツを」と文化行
政に力を入れ、宝ヶ池市営競輪の廃止や
市街地景観行政に着手するなどの施策
は評価できるとし、これらは高山市政
のブレーンとしての「左派職員人脈」
など移入人事や「社会課グループ」が
推進したと述べました。

結論として、高山時代には首長と官
僚の間に緊張関係があり、官僚がリード
シップのある市長を動かして施策
を実現していたこと、市長も官僚を利用
していたことを指摘。富井清市長の
あと、船橋、今川市長の下では「なれ
あい」になってしまったと述べま

BOOK

10期40年間、09年10月に大合併されるまで船井郡丹波町の町議会議員を務めた藤田克己氏（80歳）がこのほど「ふるさと紀行1」として刊行した。

町議会発行の「議会だより」に連載してきた「文化財シリーズ」に加筆したものが、古文書をひもとき、古老に聞いての郷土史は民衆の立場で語られていて面白

して、他の国々よりも数倍早く都の文化、宗教や芸術・人倫が伝播し、しとやかな人間性が育まってきたのも丹波の地であった。古墳から民間の立場で語られていて面白

候補として出馬、有力者らから「貧乏人の若造が当選するはずがない」と言われ、集落毎の「村社会型選挙」が罷り通る中、自転車を連ね

藤田克己著『ほのぼの京丹波——印内村物語』平安京以来、都に最も近い土地と1959年、27歳で青年団推薦

10期40年間、09年10月に大合併されるまで船井郡丹波町の町議会議員を務めた藤田克己氏（80歳）がこのほど「ふるさと紀行1」として刊行した。

町議40年、貴重な28話発掘



（ウインかもがわ刊、A5判134頁・本体1000円）

著者の生地。続いての巻を待ちたい。

（ゆ）

総会で改正された会則

- 第1条 この会は「京都の民主運動史を語る会」（燎原社）といい、連絡事務所を京都市内におく。
- 第2条 この会は1900年代における京都地方を中心とする平和と民主主義運動の歴史を調査研究し、その発展に寄与することを目的とする。
- 第3条 この会は前条の目的に賛同する会員で構成する。
- 第4条 この会はその目的を達成するために次の事業をおこなう。
 - ①語る会（例会）の開催
 - ②運動史の調査研究
 - ③資料の蒐集と保存
 - ④会報（「燎原」）の発行
 - ⑤その他目的達成に必要な事業
- 第5条 この会は年1回の総会を開く。総会において世話人、会計監査を選出し、任期は1年とする。
- 第6条 世話人会は会の運営に責任を負い、少なくとも毎月1回以上の世話人会を開く。
- 第7条 世話人の互選で、代表世話人1名、事務局長1名、会計1名の役員をおく。
- 第8条 代表世話人はこの会を代表する。
- 第9条 この会の経費は、会費、賛助会費、寄附金、およびその他の収入をもってこれにあてる。
- 第10条 この会の会費は年額3000円とし、団体の賛助会費は5000円以上とする。
- 第11条 この会の会計年度は4月1日から翌年の3月31日までとする。

1980年1月 制定
2011年7月 改定

2010年度収支一覧表（2010年4月1日～2011年3月31日）

収入	支出
収入項目	金額
前期繰越	48,448
会費	453,000
賛助会費 (名刺広告)	110,000
カンパ	10,000
雑収入	2,400
DVD収入	77,500
30年記念の会	77,000
30年記念の会	77,000
収入合計	778,348
支出項目	金額
会誌印刷	585,940
発送費	84,416
例会（会場 費・講師代等）	34,000
編集費	0
事務費	21,447
30年記念の会	58,630
DVD製作・HP	35,000
製作費	
支出合計	819,433
▲	41,085

会計監査報告

会の会計について関係帳簿類を精査した結果いづれも正しく処理されていることを認めます。

2011年6月14日

会計監査 蓮佛 亨

京都における沖縄返還運動

「京都沖縄守る会」の結成と前史

上

佐次田 勉
(元沖縄返還同盟
京都府本部事務局長)

1964年春、立命大清心館で
1964年4月26日に「京都沖縄守
る会」は結成された。会場は立命館大
学清心館(広小路)の会議室であった。



「京都沖縄守る会」の結成大会(1964年4月26日)

わずか36名による発足であった。出席者は、自治体職員、教職員、タクシードライバー、商工業者、地方議員、大学教員、大学教授、大学生および沖縄県出身の大学生といった顔ぶれであった。

「守る会」の名称は、

当時、不当解雇などに反対する労働者を支援する

「○○を守る会」が結成され活動していた。それにもちなんで「京都沖縄守る会」なら誰でも気軽に入会してくれるのではないかとの単純な発想からであった。

前に「会」の結成を後押しした沖縄県民の祖国復帰運動と新安保条約反対闘争にふれておかねばならない。「会」結成の「前史」である。

アイク米大統領を追い返した 沖縄県民

さて、現行安保条約を衆議院本会議で自民党単独で強行採決したのは、60年5月20日の午前零時のことであつた。深夜にもかかわらず30万人余の国民が国会を包囲しているなかでの暴挙であった。59年から60年にかけてたたかわれた新安保条約反対闘争は、23次にわたる全国統一行動を開催する壮大な国民的なたかいであった。強行採決の2日後、国鉄労働者を先頭に60万人の労働者が「安保反対」の政治ストライキを実行した。

沖縄でもたたかいいの火薬桶が切られていた。その年の4月28日(この日は沖縄を本土から切り離したサンフランシスコ条約が発効した日である)、「沖縄県祖国復帰協議会」が沖縄人民主党、社大党、社会党の3政党、教職員会、官公労、沖青協など17団体の参加によつた。その活動にふれるところでは、生まれたばかりの復帰協の最初の組織的な取り組みは、アイゼンハーバー米大統領に対する復帰要求デモであった。米大統領は、実は東南アジアの反共諸国訪問の一環として、新安保条約が自然成立する6月19日、日本修好百周年を記念して国賓として日本を訪問する予定であった。予定は予定で終わった。大統領の先乗りとして訪日したハガチー大統領新聞係秘書官が羽田空港で万余のデモ隊に包囲され立往生、米軍のヘリで救出される騒ぎとなつた。彼らにとつて文字通り想定外の「不祥事」であった。大統領の東京訪問は中止となり沖縄を「訪問」することになった。

その日、6月19日、米大統領は羽田空港ではなく沖縄の嘉手納空軍基地に降り立つた。嘉手納から那覇市にいたる沿道には文教局(教育委員会)の指示で休校となつた児童・生徒、「歓迎」で駆り出された人びとが星条旗と日の丸の小旗を振つて大統領をむかえた。「絶大なる歓迎」に大統領は微笑をうかべ両手をあげて応えた。マスコミは

つて結成された。

「百万ドルのスマイル」と報道した。

同時に地元紙は、銃剣と鉄カブトで武装した米兵1600人がその銃剣を沿道に向けていた写真を掲載していた。

さて、米大統領のオーブンカーが那覇市に入ると沿道の風景は一変した。赤、青、翠緑など色とりどりの労組、政党、平和・民主団体などの旗が林立していた。沿道を埋め尽くした人びとの手には「沖縄を日本に返せ」「原水爆基地化反対」「安保条約改定阻止」などのプラカードがかげられていた。

実はこの日、復帰協は午前9時すぎから「アイゼンハワー米国大統領に祖国復帰を要求する県民大会」を開き要求デモを実施することを計画していた。1万人を超える大会参加者が旗とプラカードを持つて米大統領と大田主席（知事）が会談している「琉球政府」庁舎前の広場では、声高らかに「沖縄を日本に返せ」「ヤンキーゴーホーム」の唱和が繰り返し繰り返し叫びつけられた。

「自由主義陣営」の頭目を自負する米大統領は誇らしげに声明を読み上げた。「私は琉球住民とここに住む米国民との間には、非常にいい親善関係が結ばれていると聞いています。（中略）われわれ琉球とアメリカは、友好関係が共通の目標である平和と自由な親善において相互の利益をもたらすというすばらしい実例を世界

に対して示したと思います」である。

「読んでみて腹が立つ。朝鮮戦争、ベトナム戦争の出撃基地にして『何

が平和』だ。軍事演習で山野を荒らし海を汚し、事件・事故で県民の人権を虫けらのように踏みにじつて『何が親善だ』」

権力者は自らを平和、福祉、人権等々の守り手のように宣伝、売り込み、その正体をかくそうとする。しかし、それは長くつづくものではない。沖縄での米大統領の行動はその典型的な例である。彼は「ヤンキーゴーホーム」の大合唱に直面し、大田主席との会談を30分も早く切り上げ帰途のコースを変更して、デモ隊の目のとどかない行政の横から逃げるようにならなかった。地元紙が「行政庁の裏道は大変悪い道だった。大統領の車はすぐくずれ泥をはねていた」と伝えた。

「自由主義陣営」の帝王を自負するアメリカ大統領が東京訪問を断念に追い込まれ、沖縄県民に追い出された醜態は、まさにアメリカの外交的敗北を物語るものであった。この年の1月、アイゼンハワー大統領は、1年間の基本方針となる予算教書で「沖縄の無期限保有」を宣言していた。その大統領を追い出した県民のたたかいは文字通り歴史的快挙であった。この快挙は、その後の県民のたたかいを発展させる不動の確信となつた。同時に、全国の安保条約反対の大闘争と呼応し、連帶

と協同を強める礎となつた。

60年に第1回沖縄返還大行進

1960年は、沖縄返還運動にとって画期ある年になる行動が展開された。1月24日「沖縄返還貫徹大行進鹿児島→東京2500キロ」、いわゆる第1回沖縄行進が鹿児島を出発した。実行委員会を立ち上げる体制を中心段階で組織する条件はなく、福岡県平和委員会の提唱を日本平和委員会が受けとめての出発であった。しかし、行進は孤立することはなかつた。進むにつれ行進を迎える自治体や地域で実行委員会が組織され、それぞれの団体の「リレー旗」を引き継ぐ運動が作りだされた。

この時期は「安保国会」にむけて安保反対の集会、デモ行進等が連日各地でくりひろげられていた。沖縄行進は、沖縄返還の独自の旗をかかげながら安

以上のような情勢に励まされて、京都における「安保なくせ、沖縄かえせ」の独立、主権回復への道であり、安保廃棄による日米軍事同盟解消への共通の課題であることが広く認識されるようになつたことである。

（次号へ続く）
（さじた・つとむ）

保条約反対の運動と固く結合することを重視してすすめられた。行進は2500キロを踏破して4月28日東京に到着した。行進の成果は大きかつた。当初、安保反対と沖縄返還要求を「一体のものとして取り組むべきだ」という主張に消極的姿勢だった勢力も安保反対運動をもりあげた沖縄行進を評価せざるを得なかつた。

京都医療生活協同組合（山田亮三理事長）は創立60年を迎える歴史を編んだ「60年のあゆみ」をこのほど出版した。

同生協の前身、中野眼科は1937年、26歳の

京都医療生協が『60年のあゆみ』発行

（滯期）、生協

の原点に立

中野信夫医師が千本丸太町に開業した。当時から国民のための医療制度の確立をめざし雑誌「医療と社会」を編集、戦後機を克服した「転換期」に分けて、それぞれの時代を写真・資料・証言を交えて振り返っている。（A4判60頁・非売品）

彼らを通すな

立命館「大学紛争」のなかの青春

■第2回

鈴木 元

京都で第10回原水禁世界大会

そうこうしているうちに夏が近づいてきた。

前年1963年の第9回原水爆禁止世界大会後、社会党、総評などは公然と原水爆禁止運動の分裂の方針を打ち出した。中心は「部分核実験停止条約は核兵器禁止への第一歩であり、それを支持しないものとは一緒にやれない」ということであった。私たちには、原水協が言うように部分核実験停止条約は現在核開発に成功しているアメリカ、ソビエト、イギリス、フランスなどの国々の新たな核兵器開発の手を縛らないもので支持できない」と考えていたが、意見の相違は保留し、あくまでも核兵器禁止という原則の一一致点でまとまってやつていこうと主張をしていった。しかし彼らはあくまでも自説に固執し、脱退し別組織として「原水禁」を作つてやつていくということであった。

立命館の一部学友会をはじめとす

る各学部自治会は、この社会党の方針を「支持」し分裂して作られた「原水禁」の大会への参加を組織した。

私は原水協の運動を支持して運動を進めた。街頭での署名・カンパ活動は私たちと市民の対話であるがキャンパスでは違った。私たちが署名・カンパ活動をやろうとするところが近づけをつける。そんな意図的な「論争」に乗つていると一般的な「逃げるのか」となる。毎日そんなことを繰り返しながら代表団派遣の取り組みを進めた。

ところが分裂した第10回原水爆禁止世界大会の会場を確保することが難しかった。いろいろな経緯があつたが、鷹川虎三京都府知事が全体会を府立大学グラウンド（植物園前）で、末川博立命館大学総長が広小路キャンパスの校舎で分科会の開催を引き受けられた。こうしてこの年の原水爆禁止世界大会は広島ではなく

京都で開催されることになった。結果的にはこれは学内で少数派として活動していた我々に対する激励にもなった。

私は第10回原水爆禁止世界大会立命館一部実行委員会の一員として活動した。同時に大会を京都に迎える京都原水協の事務局の一員として、大会中はバスの配車係を務めた。府立大学グラウンドに地元京都を含めて全国から3万人以上が参加した。全国から200台を超えるバスで1万人以上の人々がやってきた。大会が終わつた時に、参加者を誘導してバスの停車しているところまで連れて行くのは至難のことであつた。少ない人数でしかも慣れない私などがやるのであるから、うまくいくわけがない。さんざん怒られながらようやく「解決」したのは夜中であつた。

京都での大会に統いて長崎大会があつた。私は事務局の一人として参加した。出発は私の20歳の誕生日の8月8日であつた。まだ高速道路ができてなく、バスは一般道路を徹夜

で走り、約24時間かかって昼から開催される会場に到着した。ところが8月2日、トンキン湾事変が起きた（後年、アメリカ政府のデッキ上げだつたことが明らかになる）。長崎へ向かうバスの中で「この戦争は日本の沖縄が基地となつて行われる」「われわれ日本人は、何をどのようになすべきか」ということではぼ徹夜状態での議論となつた。

長崎大会はかんかん照りの野球場で行われたので「ともかく熱い」という印象が残つてゐる。ただ夕方になり日差しが弱まつたころから、渡辺千恵子さんをはじめ数名の被爆者の代表が発言した。彼女は自分では歩けず、がつしりした男性に抱きかかえられながら発言した。「核兵器の犠牲者は私たちを最初にして最後にしてください」とのくだりが印象深かつた。

夏休みの猛勉強でレポート

原水禁大会が終わり私は家に帰つた。家族は驚いた。私は5月ごろから家に帰つていなかつたからである。

夏休みが終わるまでの間、私は集中的に勉強をした。丁度プロゼミの宿題としてのレポートの提出が求められていた。プロゼミのテキストは前に書いたように「空想から科学へ」

1960年代の日本の現状は、どう定するか」「日本の革命の展望をどう設けるか」であった。論争課題はたくさんあったが、大学前半の一、二回生当時の重要な命題の一つが「日本の現状をどう見握できるか」の前提条件であつた。論争課題はたくさんあったが、大學前半の一、二回生当時の重要な命題の一つが「日本の現状をどう見定するか」であった。

うみてもアメリカに従属している国であることは、国民的体験からも明瞭であつた。しかし私が上回生などと論争した場合、体験的な主張だけではだめであった。レーニンが展開していた帝国主義や植民地についての概念とどう整合性のある理論的整理ができるかが求められた。

そのために当時、レーニンの帝国主義論に関する著作・論文で日本語に翻訳されている文献にはすべてに目を通して400字詰め原稿用紙20枚にまとめて提出した。

これは私が、現実と古典を結びつけて勉強し「論文」を書いた最初の体験であった。今から見れば稚拙な文章であると思うが、それ以降の学生生活を含め、ある意味では論文を書くという生活様式確立の第一歩であつた。

「日本のこえ」と京大学生党組織

このころソビエト共産党による日本共産党ならびに日本の民主勢力に対する大規模な干渉が行われていた。ソビエトはアメリカ、イギリス、フランスとともに部分核実験停止条約を結び、これを世界に押し付けて



第10回原水禁世界大会。京都府立大学グラウンドへの集中平和行進。(1964年8月3日、市電が走る烏丸通)

彼らはあらかじめの準備に基づいて「日本のこえ」という組織を立ち上げた。部分核実験禁止に賛成だけで共産党を飛び出して新しい党を立ち上げるなどと言つても誰もついてくるはずがなかつた。彼の周りの極く一部の人々が合流しただけであつた。ところが京都大学をはじめとする学生党組織の一部では志賀義雄の行動に同調し合流する者があらわれた。

西村は、京大を中心とした狭い学生運動の経験から統一を見、共産党などがトロツキストを社会的挑発集団と評価し、彼らとの統一などあり得ないとする主張に納得していかつたのだ。

私は、「志賀問題」は彼が共産党を飛び出す口実であつたのだと思つた。立命館ではほとんど影響は出なかつた。しかし京都大学をはじめいくつもの論文を書き発表したりして全学連再建運動は多少の被害を受けたが、大勢には影響しなかつた。実はこのころ、革新的な人々の間では志賀問題をはじめ、ソビエトから公然とした日本の民主勢力に対する干渉が行わっていたので、ソビエト

いた。そして日本がこの条約への参加を国会で批准するとき、ソビエトのミコヤン副首相が来日し、衆議院方針に対して、統一社会主義同盟の志賀義雄、鈴木市蔵が党議に反して賛成に回つた。当然のこととして除名となつた。

トに対する警戒心は強かつた。しかしソビエトと公開論争をしていた中國に対する警戒心は、弱かつただけではなく、一部にはむしろ中国を持ち上げるような気分もあつた。

そんな中で中国政府の招待による留学行事があつた。私が入学した1964年の夏に立命館大や学芸大から留学する学生たちの合同送別会が立命館で開催された。私は高校三年生の時、社会主義国の大への留学を考えその準備をしていたが「どうも我々の想像していることと違う」とが起こっているらしいとの見聞で取りやめた経験を持つていたので、送別会に参加しながらなんとか得心がいってなかつた。

この時、中国へ留学した学生たちは1966年に始まる文化大革命に遭遇し「支持するかどうか」と追及された。「拒否して追放され」日本に帰国した学生と、文化大革命に迎合しそのまま盲従分子となつた者に分かれた。追放された人々の多くは今日も民主陣営の一翼で頑張つておられるが、盲従分子になつた者はその後どうなつたかよくわからぬ。

百万遍学生会館に入館
先に記したように私は、クラスの友達の下宿などを渡り歩いていた。「何とかしなければならない」「途中からでも大学の寮に入れないと」考えた。そうした時、どこの大学の

学生でも入れる国が作つた寮が京都に三つあることを知つて早速申し込んだ。

戦後、困難な学生生活を支援する

ために文部省の外郭団体として学徒援護会が作られ、アルバイトの紹介などの業務を行つていた。その仕事の一つとして京都では百万遍と関田町に男子寮、東山に女子寮を設けていた。

京都以外では仙台、東京、名古屋、金沢、広島、松山、長崎、熊本にもあつた。学徒援護会が軍隊の兵舎跡や民間アパートを買い上げて学生のための寮としていたのである。

ただ当時の時代状況もあって、寮生による「完全自治寮」となつていて、運営だけではなく入寮選考も寮たが掃除や建物の維持管理程度で全く学生任せであつた。寮費は相部屋は月100円、一人部屋は月160円（当時、立命大生協の定食が55円であった）。これを管理人を通じて学徒援護会に渡すだけであつた。戰前の大同小異であつた。

私は夏休み明けに百万遍学生会館に入館した。1、2年生は6畳の相部屋に入る。3年生以上は4畳半の一人部屋であった。私の相棒は1年生の時は京大のブンド系の五年生であった。「彼を一人部屋にする」とブンドのたまり場になる、さりとて鈴

木以外の1年生を相部屋にすればオルグされるかもしれないのに君が同居してくれ」というのが執行部の意見であつた。

学生会館には京都大、同志社大、立命館大一部・二部、龍谷大、大谷大などの学生がいた。私は百万遍学生会館に五年間に住んだので大学を超えて多くの人と付き合うことになつた。

ただどこの寮でもそうであるが毎晩のように誰それの部屋に集まり、深夜まで革命論議に花を咲かせた。学徒援護会が軍隊の兵舎跡や民間アパートを買い上げて学生のための寮としていたのである。

ただ当時の時代状況もあって、寮生による「完全自治寮」となつていて、運営だけではなく入寮選考も寮たが掃除や建物の維持管理程度で全く学生任せであつた。寮費は相部屋は月100円、一人部屋は月160円（当時、立命大生協の定食が55円であった）。これを管理人を通じて学徒援護会に渡すだけであつた。戰前の大同小異であつた。

「完全自治寮」は当然のごとく学生運動の溜まり場になつた。それどころか1950年代後半から日本の

学生運動が様々な潮流に分裂するにしたがつて、寮は各潮流に「私物化」された拠点となつていった。入寮選考に生活に困つている学生が優先されるのではなく、思想的傾向を共にするものを優先して入館させる傾向も強まつていった。百万遍学生会館においても京都市内に自宅がある者や、二部学生ではあるが京都市役所の職員であるれつきとした公務員が

入館したりしていた。

こうしたことから政府は、学生自治会の代表と学徒援護会や大学の代表による入寮選考委員会をつくり、あくまでも生活困難と集団生活への適応を基準として入寮させる方針をとろうとして1964年11月7日付で、統一的な管理運営規則を施行した。

当然、学生会館自治会は全国的に反対運動を組織した。自治会側の強みは、寮の中にいたことである。「学徒援護会の入寮選考を阻止する」という方針をだしていたこともあって学徒援護会は入寮選考が出来なかつた。逆に自治会側は従来通り1965年の入寮選考を実施し入寮させた。私は、自主入寮選考が認められた。私は、自主入寮選考が認められた。そこで学徒援護会は1966年4月1日に「現状保全の仮処分」を裁判所に求め、同4月4日に執行された。

しかし自治会側は1966年についても、従来通り自治会主催で入寮選考を行い入寮させた。そのため私たちは現状保全の仮処分に違反して不法入寮させたということで被告とされた。また1966年度生以降の入館者は不法占拠者とされた。

こうして私は大学3回生から被告とされたが、国立大学の動向もあり、裁判は遅々としてすすまず在学中、ときどき京都地裁に呼び出される程

度であった。

この年秋、10月1日に東海道新幹線が完成し、10日から東京オリンピックが開催され、日本は先進国の仲間入りを果たし、日本中が前向きな明るい様子を示し始めていた。学生会館の一线の受付のところにテレビが一台あつた。アルバイトから帰つてから、その報道を見たりしていた。

新幹線は全くの「高嶺の花」で学生時代には一度も乗つたことはなかつた。その年の12月に行われた全学連再建大会にも夜行列車の鈍行(各駅停車)で行つたのをはじめ、学生時代の東京行きはいつも夜行の鈍行であつた。

全学連再建大会に傍聴参加

この年末、12月11～13日に開催された全学連再建大会にオブザーバーとして参加した。

役員には委員長・川上徹(東大)、副委員長・山田信良(名大)、山田正道(東北大)、書記長・新保寿雄(大阪府大)、書記次長・亘理純一(岩手大)。三役以外の中央執行委員が25名選ばれた。京都からは京都大学法学部の家野貞夫、京都学芸大学の則包修、そして立命館大学二部の久保孝夫が選ばれた。

60年安保闘争の7月4日に開催された第16回全学連大会において安保闘争の総括を巡つてそれまで中央執行委員会のヘゲモニーを掌握してい

たブランドが少数派に転落しながらも、反対派を暴力で追いだし全学連を私物化分裂させて以来4年5ヶ月ぶりの再建であった。分裂崩壊以来再建報道を見たりしていた。

感慨ひとしおであったろう。私は経過についての知識はあっても、具体的に取り組んできたわけではなかつたし、また私の在籍している経済学部では全学連の再建を支持する自治委員は数名しかいなかつたから、まだ何かはるか遠い存在に見えていて、まさに「傍聴者」であつた。しかし「立命館大学も、経済学部もやるぞ」との決意を固めたことだけは確かであった。

総長選挙選挙人に立候補

1965年の新年、最大の取り組みは総長選挙であった。

立命館は戦時下の軍国主義的教育を理由に廃校処分の危険があつた。後に私は戦時下の大学の事情を調査する中で立命館が他の大学に比して特別に軍国主義の強い大学であつたとは思われなかつたし、それどころか立命館においては思想を理由に追放された人は誰もいなかつた。逆に他の学校を放校処分された学生の入学を認めたりしていた。これらのことについての詳細は『像とともに未來を守れ』(かもがわ出版、1988)で記しているので関心のある方はそちらをお読みいただきたい。

先生は吉巣の京都大学からも話があつたが「これからは私学時代になる」と立命館の総長を引き受けられた。しかし学園の理事会の多数は創設者中川小十郎氏の関係者などで占められており、戦後の新しい学園づくりについては敗戦と日本の民主化が一気に進んでいた当時の状況の下、立命館では「任に堪えず」と辞任されてしまった。

敗戦と日本の民主化が一気に進んでいた当時の状況の下、立命館では全国の私立大学の中でも最も早く学生自治会や教職員組合が結成され、学園民主化運動が進んでいた矢先の末川先生の辞任であった。学生たちは末川先生の復帰運動を進めた。そして全学挙げて末川先生の総長復帰を願つてることを形にすべく高校生も含めた学園構成員のすべてが参加する総長選挙規定を理事会に認めさせ、1949年に第1回総長選挙が実施され末川先生が圧倒的多数の支持で総長に選出された。

選挙は間接選挙であった。総長候補推薦委員会が次期総長候補を推薦し教員、職員、学生、高校生から選ばれた選挙人が推薦された名簿の中から投票するという形式であった。

教員の選挙人は教授会において、職

員の選挙人は職員職場をいくつかの選挙区に分けてそこで選出、学生は学部単位で、高校生は学校から選ばれた。しかし末川先生が在任中といふこともあり末川先生以外に候補に

推薦される者はなく、事実上末川先生の再任支持のためのセレモニー化していた。そんなこともあり学生選挙人は形式上は学部単位で選ばれることがになつたが回数を重ねるにしたがつて形式化し、実際は自治会が推薦し、ほんの少数の投票で選ばれていた。

私は選挙の趣旨からいつても、そして何よりも自治会運動の在り方からいっても自治会が推薦する者が形式的な信任選挙で選ばれるといふのはおかしいと判断し、学生選挙人に立候補することにし、全学でただ一人、自治会が推薦していない候補者となつた。

私は「末川先生に期待する要求」というビラを作り、タスキをかけてキャンパスで候補者活動を展開した。これは大きな話題になつた。結局経済学部を含めて他の学生選挙人はせいぜい十数票から二、三十票という得票であつた中で、私だけが百三十票ほどを得票して選出された。この選挙を通じて私は全学的に「経済学部に鈴木」という民衆がいる」ということが知れ渡るようになつた。

(以下次号)

教授は戦時下の京都の大学で何をしたか（要旨）

く1く

この「資料」は、「夕刊京都」1946年5月18日から6月22日まで連載された記事の、一ノ瀬秀文氏による要約です。

（5）ぶつた切られた太鼓叩き

ウルトラ右翼者流では“赤”

（5月22日）

思想に対しての色盲というか、不見識といふか、売春婦のごとき行動をとるもののが日本の知識階級上層に君臨しているということは、悲しまるべきわれわれの宿命である。

（1）京都学派の人々

はじめに／アカデミー一般

（5月18日）

かつて、研究室に閉じ籠つていて日露戦争を知らなかつた学者があつたし、また日本がこの戦争に勝つたとき内村鑑三が戦争に反対し、世界の平和を主張したトルストイがいた。日本はトルストイのようないい人がいたので、戦争に勝つて淋しいと言つた。だが今度は戦争に敗れた上に、戦争中に一人の戦争反対者をも聞かなかつたという意味で二重に淋しい。淋しいを通りこして、あの戦時のアカデミーの空気だと、もし戦争に勝ついたら、文部大臣に箕田胸喜で、次官に野村重臣があり、東京、京都その他の大学の総長に大川周明、鹿子木員信、作田莊一、そしてひょつとすると西田直二郎がなつたかもしない。

このような連中が当時の大学にも雲の如く群がつてゐた。いま戦争が終つた後、世のためには物語たりし、京都の学界の光景のスナップ集をつくつておこう。

（2）和製ハウスホーファー

啖呵きらぬかコメディアン
（小牧實繁教授）

（5月19日）

京都帝国大学文学部のなごやかさ

が起つてゐた。「地政学」という学問で人気を博していた小牧實繁教授で、彼が大まじめにやればやるほど、それは、チャブリン、キートンなど第二級コメディアンと同

じ「笑ひ」をもたらした。

戦争が終り、ナチスドイツの地政学者ハスホーファーが戦争犯罪人として逮捕されたが、日本の小牧教授はそうならない。小牧教授にとっては心外千方百で、「日本」のハウスホーファーがいるのが分からぬのか」と啖呵をなぜ切らないのか。というのも、「改造」「中央公論」が出ていた頃、原稿を頼みにゆくと、「巻頭論文にしてくれるなら書いてもいい」という御説があつた、というほどのウルサイ兄さんだつたからだ。学説、講義内容は、「アジアは六大州の母体であり、日本はそのまん中に扇の要の如く、人間のヘソの如く鎮座している」というような地理的条件の神話的再構成だつた。

（3）事実認識をも誤つた世界史四人組

高山岩男、高坂正顕、西谷啓二、
鈴木成高

（5月20日）

戸坂潤の友人たち

1930年代に思想の分野で反体制的革新の立場に立ち活躍して逮捕された戸坂潤、終戦の年に逮捕された哲学の三木清が、終戦の夏と秋に死んだ。戸坂や三木が獄中の人となつて、その「眞実」を埋めるべきはずの「戸坂の友人たち」は、戦時になると所謂「世界史四人組」として名を馳せていたのだつた。

「世界史四人組」というのは京都帝大の高山岩男、高坂正顕、西谷啓二と三木の鈴木成高の四人で、戦争の進展とともに彼らは戦争中、ファシズムの一翼につなつて、侵略戦争の大鼓を叩いたくせに、エンドのテンボで躍進した。大東亜戦争は

完全に倫理化された。結果は彼らが言うようにはならないで、日本の敗戦となつた。四人組は事実の認識において誤つてゐた。日本には道義エネルギーなど全くなかった。声を漏らして彼らが騒ぎまくつた意味はこれで全くなくなつた。

（4）軍閥・官僚の提灯持ち

（思想的、道義的領域で活発な役割
超国家主義イデオロギーの色々の階層

（5月21日）

川周明、鹿子木員信、池崎忠孝は古色蒼然としていて、橋本欣五郎、葛生能久、笛川良一、児玉譽士夫などの行動派あまり変わらぬつた。彼らの言動は通俗小説「勧善懲惡劇の善玉悪玉」のように判り切つていて、もつと近代的で緻密な方法で国民を戦争に駆りたて、また心理的道徳的領域で活躍した連中がいた。彼らにたいする肅正の手段がとられない片手落ちだ。

文部省教学局国民精神研究所の系統に属する紀平正美、平泉澄といった大物のほか、これにつらなる全国官公私立大学専門学校の総長校長、学生課などが大学を窒息状態に置いていた。京大学生課長木村素衛（倫理学者）はその典型、東大文学部の和辻哲郎の風土史觀も「臣民の道」に至つて完全に提灯持ちになり下つた。

（6）勉強すればバカになる

復帰、追放、転職の石川教授

（5月23日）

彼らは戦争中、ファシズムの一翼につなつて、侵略戦争の大鼓を叩いたくせに、も対立し、あらゆる場合に適当でした。日本海軍がファシズムでなかつたわけではない。はじめから無理な戦争が奇烈となると理解がはげしくなり、矛盾が激しくなつて、陸軍、海軍に衝突が生じただけだ。

て京都帝国大学経済学部の石川興二教授を追放し、さらに谷口吉彦、柴田敬の二人も追放した。この学部はさきに文部省から「追放令該当者アリヤ」と訊かれたとき、「ナシ」と回答した。ところがすぐにガタガタと崩れ、部長の鰐川虎三をはじめ、小島昌太郎、汐見三郎、谷口吉彦、石川興二、柴田敬、中川與之助、松岡孝兒、徳永清行、さらに関西大学に移つて辞めた高田保馬などの大量の追放者を出し、潰滅に瀕した。「ナシ」というのが「アル」「イエス」が「ノー」ということになると、これは「あべこべ大学」だ。

ここでもう一つ事件があつた。昭和十八年(1943)三月、思想問題で休職を命じられた石川興二が、昨二十年(1945)春復職を許され、人文科学研究所勤務を命じられ、終戦後の十月のSCAPの教育に関する指令に基き、教授会は満場一致で復職を可決(11月13日)。そして、今度は上述のように石川はマ指令によつて追放された。詳細は以降になるが、なぜ石川は追放され、復職し、また追放されねばならなかつたのか。昭和十八年の追放は、陸軍ファッショと海軍ファッショの対立でも言及したように、ウルトラ・ファッショによるもので、石川が弁証法とか、マルクスとか横文字をいうのが気に入らなかつただけのこと。「石川教授の天皇を中心とする国家協同圏論」は言葉づかいが左翼的に見えるだけで、結局は右翼反動論なのに、ウルトラ・ファッショの目からは「わけの分らない「赤」」と映り、無批判の毛嫌いを以て彼を遇したわけだつた。

(7) 反動戦線結成へ

復帰教授組へ氣を廻す

あべこべ大学教授会記録(続)

（5月24日）

石川追放、再追放事件をもう少し詳しく見よう。石川はマ指令追放の時、記者團に、自分は「赤」と言われたことがあり、マルクス主義に理解を示したこともあるので、

どうしてこのようになるのか分らないと、梨本宮のようなことを言った。ボケ、健忘症を装うあたりは大川周明、東条英機に似ている。昭和十四年(1939)5月、経済学部二十周年記念講演を彼独特の「天皇中心の国民共同体」説なるものの真髓を「錦の御旗が一重橋の奥深くあらわれたとき」「一切を、自分の五感をもつて直接体験すること」ができたと述べた(同氏著「新体制の原理」337頁)。そして、日本が「東亜共同体なるものを建設すべき使命」を持つてゐることを説き、中国は人形でありまがいることを指摘し、「中國は人形でありまして、その背後には人形使いがいるのであります。よろしく弾一発をも惜んで人形使いを射たねばなりません」(355頁)。石川をファッショが追放したのはファッショの大変な見当ちがい、混乱だつた。教授会もまちがつてゐた。では、復帰は正しかつたのか。SCAPの復帰令は「進歩的な者でファッショによって追放された者」についてのもの。石川は義理にも進歩的とはいえない人物だつたから、教授会が復帰を可決したのは「あべこべ」だつた。終戦後、瀧川幸辰教授が復帰してくる。そのバックには強大な勢力がいると想像された。そこで文学部の西田直二郎、中村直勝、小牧實繁、木村素衛、それに「世界史四人組」などが石川興二を媒介にして、鰐川虎三、高田保馬、汐見三郎、小島昌太郎、谷口吉彦、松岡孝兒、中川與之助、柴田敬などの諸教授、諸勢力に結びつき、ここに一大反動戦線の陣地が構築されようとしていた。

(8) 驚くべき超国家思想の宣伝

石川教授のカムフラージュ解剖

（5月25日）

いという人もあるだろうが、彼こそは反動的學識人の明らかな一典型なのでよく見ておくことが絶対に必要である。

そうすれば、他の、例えは和辻哲郎とか高坂正顯とか似而非学者のさまざまのカム

フレージュの正体をはつきりさせることになる。

彼は和服を常用し、喋りだすとどまるところなく、マルクス、ヘーゲル、ディルタイの名がとび出し、アリストテレスや西田哲学が重なつて出て、古今の思想家がチカラチカラと提示される。しかし、それらを貫いて流れる鎮魂帰神的昂奮をとりのぞくと、あとは映像が消えたスクリーナン、しみのある幕の白らしさだけが残るだけ。

石川の世界史の発展的構造は、まず意志的ケルマンにつづいて、理智的なアンクロサクソンが現れ、最後に情緒的な日本が来るべき国民の時代を担うものとして現れる大変な見当ちがい、混乱だつた。教授会もまちがつてゐた。では、復帰は正しかつたのか。SCAPの復帰令は「進歩的な者でファッショによって追放された者」についてのもの。石川は義理にも進歩的とはいえない人物だつたから、教授会が復帰を可決したのは「あべこべ」だつた。終戦後、瀧川幸辰教授が復帰してくる。そのバックには強大な勢力がいると想像された。そこで文学部の西田直二郎、中村直勝、小牧實繁、木村素衛、それに「世界史四人組」などが石川興二を媒介にして、鰐川虎三、高田保馬、汐見三郎、小島昌太郎、谷口吉彦、松岡孝兒、中川與之助、柴田敬などの諸教授、諸勢力に結びつき、ここに一大反動戦線の陣地が構築されようとしていた。

(9) 残虐戦争に導く国民皆貧論

—高田保馬博士

学振・学研の大御所

河上肇先生が一月三十日急逝された。明治・大正・昭和を通じての日本人民解放戦の聖徒ともいふべき先生の死だつた。

は先生がいたところだが、その荒廃の極となつたのは誰の責任だろ。河上先生はその思想が大学に適わしくないと罷免されるとサッサと出て行かれ、結局牢獄の生活となつたが、それは筋の通つた道だつた。

高田保馬博士は1946年4月までは学部最大の花形であった。敗戦を迎えたわが祖国の現状こそ、博士が国民に「そうちの耐乏をすすめる秋がきた」ともいえた。博士はあちこちで民主主義講演をしたのち、一躍関西大学学長に就任した。京大的学生は高田に対して批判を加えなかつたのに、関大の学生はたちまち起つて一撃を加えた。博士の大学長は僅か三日で一学生の投書によつて消滅した。

しかし、この結果こそ当然至極で、敗戦後も京大に居残り、貧乏論が時流であるかのように考えたのは太々しい限りだつた。博士と並んで学術研究会、学術振興会といふ組織から莫大な金を引出し、自分にも取て満身の傷をうけながらも、執拗に主張をつづけてきた。それゆえに、高田博士は、汐見、小島兩教授とともに、また中村孝也博士が河上、天野(貞祐)との論争によつて消滅した。

昭和十三、四年荒木大将が文部大臣になつたことが学問思想の転換をもたらし、石川教授流の挺身組日本経済学、東亜経済学の開講の辺りから怪しくなり、著述に勅語の引用ばかりとなつた。そして最後に出てきたのが「大家(おおやけ)の論理」で、日本の國家を「天皇中心の大大家」と規定し、人類の知性を「英米的個人主義論理」と定して、「われわれはこの異國的論理から解放されねばならぬ」と説き、日本は世界の論理の転換者としてこの世紀の中に立ち現れたと叫号した。「万邦をして各々の所を得しめ、兆民をして悉くその堵に安んぜしむ」ために「聖戰」をたたかうと太平洋戦争を合理化した。

（以下次号）

（5月26日）

「うたごえ」よ高らかに！

——京都の「うたごえ運動」の歩みから——

志摩 肇（京都ひまわり合唱団創立参加者）

その13

アコーデオンが果たした役割

今迄書き連ねてきたことをふり返り、ふと大切なことを忘れていたと気がついた。

それはアコーデオンのことである。アコーデオンは、「うたごえ運動」創生期から常に人々の輪の中にあり、大切な伴奏の役目を果たし、場の雰囲気を作ってきた。しかし最初から我々がアコーデオンを手に出来た訳ではない。伴奏もないまま音叉を「ブン」と鳴らして音をとり、「一・二の三」と唱い出す。実は一般的（特に男声）合唱団なら通常の演奏スタイルが常だが、何か楽器があれば「唄い出し易い」し、リズムやメロディの流れもスムーズである。

当時は学校・教会以外、各家庭はもちろん集会所にもピアノ・オルガニコンがあるところは少なく、我々のレッスンと演奏にアコーデオンが入ってきたのは、我々の活動が人々に認められてきて、そこから伝手を頼り

アコーデオンが借りられたときからである。

アコーデオンは右手でメロディを、左手は蛇腹を開閉しつつ伴奏を行う樂器で、電源も不要、「どこにでも担いで行ける」長所を持つが、その代わり樂器の重量が重く、ちなみに私の所有するアコーデオンは、一台が一〇・五キロで今一台は七キロ。加えて値段も高いのが短所（私所有は一台が三四万円・今一台が七万円）である。

この重量と価額は、左手ベース鉗（ボタン）数（最低一八から最高一二〇）と、右手リード（通常M・M・Lの三つがあるが、超簡単なものは一つ）で、この組み合わせと製作メーカー（国産・輸入）で重量と価額に差が出る。

最初に借りられたのは玩具のみ

アコーデオンは、もともとヨーロッパで発達してきた樂器で主要産地はイタリア。

南欧州の温暖な氣候に育てられた木材と、中部欧州の進んだ機械工業

が結びつき、優秀な樂器が生まれたと言われている。

アコーデオンの構造は、右手メロディ部分・左手伴奏（ベース）部分・真中蛇腹部分に三分解出来るが、特に左手伴奏（ベース）部分の中は、アルミの細い棒が複雑に組み合わされる正に「精密機械」なみで、「よくもこんなものを、誰が？」と感心させられる。

我々が一晩最初に借りられたのは、左手伴奏部分鉗が二列、一列六個の一二ベースで、今から思うと玩具なのもの。

というのはこれではドレミファソラシドの長音階の曲ならよいが、ラシドリミ#ファ#ソラの短音階曲は弾けない。

自分勝手に創意工夫して

せめてベース部分鉗が三列・一八が、いやその上の二四は、更に進んで四八、六〇から八〇そして最高の一二〇へと夢を抱いたものである。

それでも貸してくれた人の好意を無に出来ず、また「何も伴奏樂器がないよりマシ」と、創意工夫をこらさすがイタリアでは歴史に支えら

し使わせて貰った。

但しアコーデオンが来たからといって誰もが弾ける訳ではない、たまたま私がピアノ教室に僅か半年足らず通つており、右手は何とか弾けることから「お前がやれ」となり、合唱レッスン指導と併せ結果として専属伴奏者も兼ねることとなつた。

一般の人々は右手鍵盤を見て「難しいでしよう」とよく言われるが、右手・左手では圧倒的に左手部分演奏が難しい。

何故ならば蛇腹の開閉が、言わば人間の呼吸の役目で、「速さ・遅さ、流れれる・切り刻む」により、また曲想を左右する。

さらに左手部分の鉗は、上下に音階上の音五カ分ごとのピッチ差で並んでいるが、その場所は弾く者からは見えず、「全くのカン」で左手指を飛ばさねばならないからである。

れた養成課程があり、例のコバ君も留学当初は地元小学生クラスに編入させられ、アコーデオンを肩にかけられたベルトの調整からレッスンされたと聞く。

従つて日本でアコーデオン弾きを目指す者は、民間先覚者を探し教えを乞う以外ないが、うたごえ運動創生期に誰もそのような先生が見つかなかつた。それでも何とか音が出せ前奏から歌を一曲弾きこなし、仲間が楽しむ姿を見て自分も一かどの伴奏者と扱われ、気を良くしたものである。

退職後、初めて知った正式演奏法

ところで私は前稿の通り身体上の理由から歌が唄えなくなつたところから、自分の音楽活動は「以後アコーデオン以外ない」と考えていたところ、ふとした縁でアコーデオングループの存在を知り、民主商工会事務局を定年退職後に大阪・寝屋川の京阪アコーデオンクラブに参加した。

このクラブは、最高時でも十余名の小さな団体で、講師が元大阪・関西合唱団伴奏者の吉田親家さん。関西合唱団は私たちと同じ「うたごえ運動」の関西における中心的存在で、私たち京都ひまわり合唱団とも密接な関係にあり、吉田さんは旧知の仲であることから私も気軽に参加出



ひまわり合唱団団友会15周年新年うたう会で
(2003年1月、中央が筆者)

私もそのため、厚顔にもモーツアルトのセレナーデ・交響曲二番の各一楽章（抜粋含む）も独奏した。

* 但し現在私は

昨年夏に大腸癌発見、入

院・手術のた

めと、残念な

がら寄る年な

みで重たいア

コーデオンを

担ぐ寝屋川ま

での往復に耐えきれず一旦退会

している。

京阪アコーデオンのメンバーには

異色の人もいて、かつて府会議員候補として三度の選挙戦を闘い、また

四年前に続き今春も市長候補に担がれ健闘した女性で元高校数学教師の長野邦子さん。アコーデオンの腕前もタイシタもので私は足元にも及ばず、「一体いつ練習してるのであ

り出は懐かしい。

しかし最近では「うたごえ」の演奏もステージ中心となり、伴奏もピアノに代わり専門ピアニストが果たし、アコーデオン伴奏が激減していく。常に仲間が輪になり心を唄い上げてきた「うたごえ運動」のあり方を思うと、寂しい気がするものである。

以上をもつて「京都のうたごえ運動」創生期十五年の報告を終わります。長期にわたり紙面提供戴いた関係者の方々に厚く感謝し筆を置きます。

また関西には各地でアコーデオンのクラブが存在し、年一度ビバ・アンコの名称で交流会を、さらに毎年夏には西日本として中国・四国・九州も含めた講座・交流会を行い、京阪クラブとしての演奏に私も参加しました。

その中で参加者からよく「何年アコーデオンを弾いてますか?」と質問を受けたが、これほど返答に窮したことはない。

「触ってきたのはン十年ですが、正式には十年ばかり」と答えるのがやっとだった。

（しま・はじめ 京都ひまわり合唱団創立参加者）

このクラブ参加の中では、私は初めてアコーデオンの正式演奏方法を知ることが出来、今までの我流な弾き方を反省させられた。

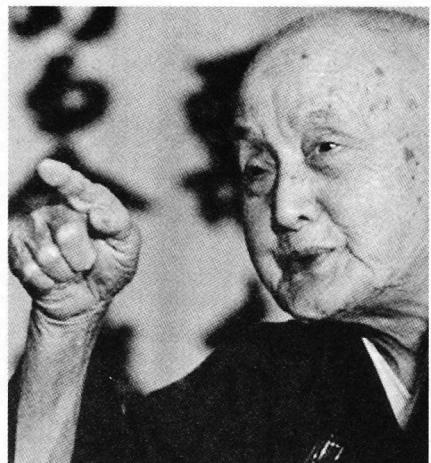
またこのクラブは演奏曲の範囲が極めて幅広く、いわゆるクラシックからタンゴ・シャンソン・ワルツ・ブルース・ジャズ等、昔なら「軽音樂」といわれたジャンル、そして日本のナツメロ・演歌迄をレパートリーとし、私も初めて見る楽譜・初めて弾く曲も多数あった。

また年一度は演奏会があり、そこではメンバーは必ず一曲の独奏が義務付けられており、選定曲は本人の自由で各人が色々な立場から選曲し演奏した。

このクラブは、最高時でも十余名の小さな団体で、講師が元大阪・関西合唱団伴奏者の吉田親家さん。関西合唱団は私たちと同じ「うたごえ運動」の関西における中心的存在で、私たち京都ひまわり合唱団とも密接な関係にあり、吉田さんは旧知の仲であることから私も気軽に参加出

大西良慶師を語る

京都宗平協50周年の集いから



大西良慶師（1875～1983）

奈良県出身。1889年母に勧められ出家、1899年興福寺23世、1904年法相宗管長、1914年、清水寺住職となり、1962年に日本宗教者平和協議会会长に就任。1965年に清水寺を本山とする北法相宗を設立し、初代管長に就任。諸宗に造詣が深く、仏教徒会の要職を歴任した。また良慶節といわれる説法で親しまれた。清水寺で何十年も続けられた晩天講座は有名で、仏教徒が働くということは、仏さまの行をすること、人さまのために尽くすことだという。福祉と救護活動の先駆的役割を果たし、数多くの平和運動に尽力したことはつとに有名。とくに1970年の京都府知事選挙では鷹川知事の応援団として円山音楽堂で熱弁をふるい勝利に貢献した。亡くなるまで全国革新懇の代表世話人で、会議には福岡精道師が代理として出席されていた。写真は円山音楽堂で訴える大西良慶師（1970年4月）

京都宗教者平和協議会（宮城泰年理事長）は結成50周年を迎えた。6月10日午後、上京区の聖公会京都教区センターホールで「大西良慶師を語る」講演会を開いた。以下、森清範師（清水寺貫主）ら4師が語った「思い出」。

宮城泰年師（本山修驗宗門跡門主）は、60年安保のあと、61年4月に京都仏教徒会議を母体にして京都宗平協が結成されたこと、そして翌62年に日本宗平協が大西良慶師を理事長に発足、108歳で亡くなるまで会長を務められたことを述べた。

森清範師は、「60年当時はまだ学生だったが、15歳のときから（大西）和治8年生まで廢仏毀釈を見ておられるだけに、自らの体験とダブつたのでに良慶師は支援活動の先頭に立つ。明治8年生まで廢仏毀釈を見ておられるだけに、自らの体験とダブつたので

怖さもあつたが、和治8年生まで廢仏毀釈を見ておられるだけに、自らの体験とダブつたのでに良慶師は支援活動の先頭に立つ。明治8年生まで廢仏毀釈を見ておられるだけに、自らの体験とダブつたのでに良慶師は支援活動の先頭に立つ。明

79年に「ベトナム友好勲章」を、清

0万円を集めベトナムへ贈ったこと、73年にはパリ和平協定が調印され、国際赤十字から入国許可をもらい三日かけてハノイの北ベトナム仏教会に救援金と良慶師の親書を届けたことを述べた。

良慶師のもと、京都仏教徒会議事務局長として活動した五十嵐隆明師（総本山永觀堂禪林寺法主）は大正10年（1921）に良慶師が初代理事長として設立した老人福祉施設「同和園」（伏見区醍醐）の三代目理事長。「今年90周年を迎えるが、かつて一人たりとも役人を受け入れずに仏教精神で運営してきた」といい、「良慶師の柄は『和顔愛語』に尽きる。『有漏有漏するな、大道を歩め』『天行は健なり』といつも口にしていた姿を忘れられない」。そして、それが長寿の秘訣でも

いを一生懸命に実践させていた。資金話題は今は亡き福岡精道師（1912～1996、清水寺勤学局長）に、「純真なお方で、良慶師の平和への思

いを一生懸命に実践させていた。資金話題は今は亡き福岡精道師（1912～1996、清水寺勤学局長）に、「純真なお方で、良慶師の平和への思

いを一生懸命に実践させていた。資金

迷途民衆笑悲哀
七人稱ん光美深
一葉飄風秋色濃
西進埠
法知民大急急客ト逃ま
良慶
日本
ナニカ

ホー・チ・ミン大統領の死去（1969年）に際し書かれた追悼の書。90年には「大西良慶和尚のホー・チ・ミン氏の逝去を悼む書を贈る会」がつくられ、ベトナムへ届けられた。（福岡精道師が編集した同会発行『日本とベトナム』より）

京都の民主運動史を語る会 9月例会

治安維持法犠牲者の足跡を訪ねて

10月23日に清水寺で初の「治安維持法犠牲者慰靈祭」が開かれるが、治維法同盟府本部の会長として、犠牲者ゆかりの地と人を訪ね歩きその足跡を機関誌「不屈」京都版に毎号連載してきた岡本康さんに、革新京都の先駆者たちの足跡からいま何を学ぶべきかを語っていただく。

とき
9月30日（金）
午後2時～

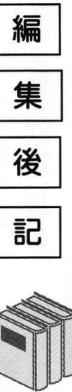


語る人
岡本 康さん
(治安維持法国家賠償要求
同盟京都府本部会長)



1928年生まれ。治安維持法国家賠償要求同盟京都府本部会長。京都高齢者福祉事業団理事長、京都高齢者運動連絡会代表委員など。元京都民医連事務局長。著書に「革新京都の先駆者たち—治安維持法犠牲者の群像」(つむぎ出版、2008年)。

例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料、会員外の方は300円。



▽京都の市電が撤去された頃、欧米や日本
の地方都市ではLRT（新型路面電車）が
導入され今も軽快に走っている。京都のま
ちには路面電車が最も似合っている。それ
を活かさずに莫大な建設費がかかる地下鉄

を選択したのは、原発と同じで、背景に「利権」があった、としか考えられない。それでも「市電をまもる会」の運動に学ぶべき点が多い。
▽投稿を希望する人が増えているようだ。
遠慮せずにどしどし送つてほしい。編集部
のメールアドレスは
yuasa@kamogawacorp.jp
もちろん郵便でも結構です。

（湯浅）

自費出版、ご相談下さい。

現代史の貴重な記録・証言は「自費出版」によって支えられているといつても過言ではありません。創業から15年、私たちは個人や団体の志を共有して質の高い本作りに取り組んできました。これからもみなさんとともに草の根の出版文化の一翼をになっていきたいと考えています。

自費出版をお考え方の方

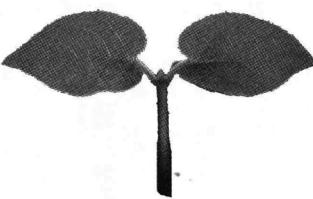
原稿をお預けください。

出版の目的やご意向、

ご予算に応じた出版プランや

本づくりの手順について

ご相談に応じます。



冊子「自費出版なるほど
BOOK」を送呈します。
お問い合わせください。

◎かもがわグループの自費出版専門会社。

株式会社 ウインかもがわ

〒602-8119 京都市上京区堀川通出水西 電話 075-432-3455 FAX 075-432-2869

メール info@win-k.co.jp

編
集
後
記

10月23日に清水寺で初の「治安維持法犠牲者慰靈祭」が開かれるが、治維法同盟府本部の会長として、犠牲者ゆかりの地と人を訪ね歩きその足跡を機関誌「不屈」京都版に毎号連載してきた岡本康さんに、革新京都の先駆者たちの足跡からいま何を学ぶべきかを語っていただく。